

恍惚と幻想——〈蛭取る老人〉との邂逅

——『決意と独立』論——

黒岩忠義

(1995年10月16日 受理)

Trance and Vision —— Chance Meeting with “The Leech-Gatherer”

—— An Essay on Wordsworth’s *Resolution and Independence* ——

Tadayoshi KUROIWA

1

『蛭取る老人』(*The Leech-Gatherer*)の題名でも知られる『決意と独立』(*Resolution and Independence*) (1802)¹⁾の創作過程への言及は『ドロシーの日記』(*Journals of Dorothy Wordsworth*)²⁾に詳しい。1802年5月4日(火)、7日(金)、9日(日)、同年6月14日(月)、さらに間をおいて7月2日(金)、4日(日)の『日記』に本詩への言及が見られる。これらの記録によると、この詩は1802年5月3日に書き始められて、同年7月4日(日)に書き終えられたことになっている。5月4日の『日記』には「わたしは彼が前の晩に書き始めていた *The Leech-Gatherer* を書き写した。そして彼はその詩のいくつかのスタンザを今朝寝床の中で書いた。その日は大変暑い日であった。...」(*May 4th, Tuesday. ... I wrote The Leech-Gatherer for him, which he had begun the night before, and of which he wrote several stanzas in bed this morning. It was very hot ...*)とある。さらに、7月4日(日)の『日記』は「・・・わたしは起きた時、気分は余りすぐれなかったが、お茶を飲んだ後はいくぶんよくなった。ウィリアムは少し散歩したが、わたしは行かなかった。私たちは一緒に窓辺に座った。その日は思いがけなくひどく湿っぽい夜になった。ウィリアムは *The Leech-Gatherer* を今日書き終えた」(*... When I rose, I was very far from well, but I grew better after tea. William walked out a little, I did not. We sate at the window together. It came on a terribly wet night. Wm. finished The Leech-Gatherer today.*)とある。しかし、実際にその初稿が書き終えられていたのは、5月7日である。『日記』によれば、「前夜は珍しくよく眠れたので体力は回復し、*The Leech-Gatherer* の執筆にとりかかり、夕食時まで精いっぱいとりくみ詩を書き終えた時は死ぬほど疲れていた」(*May 7th, Friday. William had*

slept uncommonly well, so, feeling himself strong, he fell to work at *The Leech-Gatherer*; he wrote hard at it till dinner time, then he gave over, tired to death. — he had finished the poem.’) と言うのである。

しかして、5月9日(日)の『日記』が示すように、助言を求めるために「ウィリアムは朝から夕食まで殆ど休みなく *The Leech-Gatherer* にとりくみ、わたしは *The Leech-Gatherer* とその他の詩をコールリッジのために書き写した」(‘*May 9th, Sunday Morning. ... William worked at The Leech Gatherer almost incessantly from morning till tea-time. I copied The Leech Gatherer and other poems for Coleridge.*’)のであった。しかし、それはコールリッジには「著者固有の文体の不統一」(‘INCONSTANCY of style’)³⁾のため、またメアリーとセアラには語句の表現の点において多少、気にいられず⁴⁾、ワーズワスは最終的に三者の批評と助言を取り入れ、初稿をいくらか修正した形で脱稿したのが7月4日ということになる。このことは7月2日の日記に、「わたしはウィリアムをひとり残し、M.H. とコールリッジへの手紙を書き、また *Leech-Gatherer* の修正を書き写した」(‘... I left William, and wrote a short letter to M.H. and to Coleridge, and transcribed the alterations in *The Leech-Gatherer.*’)とある文言からもうかがい知ることができる。しかし、この詩が『決意と独立』の題目のもとに発表されたのは1807年『二巻本詩集』(*Poems, in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807*)であるから、創作から5年後のことである。言うまでもなく、この『二巻本詩集』には『抒情民謡集』*Lyrical Ballads* (1798)出版から、いわゆる「偉大な10年」(*Annus Mirabilis*)といわれる時期に書かれた“The Solitary Reaper”, “I wandered lonely as a cloud”, “The Sonnet Composed upon Westminster Bridge”, “Ode: Intimations of Immortality”などのごとき珠玉の抒情詩編がことごとく含まれ、それらの諸作品の中でも『決意と独立』は詩人ワーズワスの詩的想像力の問題を論ずる上で、『不滅のうた』*Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood* (Composed March 1802 – March 1804. Published 1807), に次ぐ重要な作品であることは言うまでもない。この作品には、他のどの詩にも増して歓びと絶望、恍惚と幻想、また深い感情と相俟って『抒情民謡集』に見られる素朴な文体のように、よりワーズワス的な特質が見られる。

本詩の起源は創作のおよそ2年ほど前に起こった出来事まで遡る。そのときの模様は1800年10月3日(金)の『ドロシーの日記』に詳しい。つまり友人に伴われて友人宅を訪れた帰路、ワーズワス兄妹は二重に腰の曲がった蛭取る老人に路上で偶然出会ったのである。老人は服装、目鼻だちの点で詩人には深く印象に残るものがあった。老人は包を手に持ちカーライルまで聖書を仕入れに行くところであった⁵⁾。従って兄妹が出会った時はその老人は本詩に描かれているように、一人でその「寂しい場所」(‘this lonely place,’ (51), ‘a lonesome place’ (89))の池の傍らで実際に蛭を取っていたのではなかった。老人は優しい妻と10人の子供達に恵まれたが、一人の子供を除いて妻にも

他の子供達にも先立たれ、その一人の生き残った船員の息子からも音信不通のまま、一人で取り残された老人は蛭をとって生計を立てるのを仕事としていたのである。しかし、今ではすっかりその蛭の数も少なくなり、物乞いをして暮らしをたてていたと言うのである。

2

『決意と独立』の描写は対照的である。天候の変化、明るい朝の風景と不確かな将来を思うときの詩人の心情、詩人の過剰な不安と蛭取り老人の不可解ではあるがその確固たる信念、蛭とり老人に出会う前と後の心の変化などである。このように対照的な描写を中心に物語は展開して行く。冒頭は嵐が夜どおし吹き荒れた後、穏やかな春の朝の描写で始まる。

There was a roaring in the wind all night;
The rain came heavily and fell in floods;
But now the sun is rising calm and bright;
The birds are singing in the distant woods;
Over his own sweet voice the Stock-dove broods;
The Jay makes answer as the Magpie chatters;
And all the air is filled with pleasant noise of waters. (1-7)

(夜どうし風は吹き荒れ、

雨は滝のように降りぬ。

されど、いま太陽は静かに、あかあかと昇りゆき、

鳥どもは遠くの森でさえずっている。

山鳩は自分の美しい調べに酔いしれている。

かけすは鶺鴒のおしゃべりに答え、

大気は快ちよい水音で満たされている。)

此の描写は生の初原の歓びである。詩人は幸福感に包まれ、周囲の美に浸っている。この一節は雨があがり、夢中になって鳥たちが愛の季節の到来を告げる旧約聖書『ソロモンの雅歌』(*The song of Solomon*, 2-11-12.)の次の描写に酷似する。

'For, lo, the winter is past, the rain is over *and* gone; The flowers appear on the earth; the time of the singing of *birds* is come, and the voice of the turtle is heard in our land.' (*The Song of Solomon*, 2-22-12.) (「ごらん、冬は去り、雨の季節は終わった。花は地に咲きいで、小鳥の歌うときがきた。この里にも山鳩の声が聞こえる。」) (日本聖書協会、新共同訳)。

しかし、自然の快適さに酔いしれるのは鳥達だけではない。太陽を慕うものはみな外に出て自然の恵みを謳歌している。大空は朝の誕生を歓び、草は雨の滴で輝き、豊饒のシンボル 野兎は濡れた地面から水煙を上げて楽しく跳びはね、その水煙は太陽に輝いている。そのような至福の享受者として、詩人は「浮き世の空しい、また憂鬱な出来事」(‘all the ways of men, so vain and melancholy’) (20-21) も忘れたかのように「大地の幸せな子供」(‘a happy Child of earth’) (31) の気分に入り、偶然荒野に居合わせたのである。

I was a traveller then upon the moor;
I saw the hare that raced about with joy;
I heard the woods and distant waters roar;
or heard them not, *as happy as a boy*;
The pleasant season did my heart employ;
My old remembrances went from me wholly;
And *all the ways of men, so vain and melancholy* (15-21)
(Italics Mine)

(その時、私はたまたま荒野に居合わせて、
歓び跳ねまはる兎を見、ざわめく森や
遠くの流れの音を聞きおりぬ。
それとも聞かなかったのだ。——少年のように、
心浮き浮きして、楽しい季節に心を奪われ。
古い記憶は消え失せ、儂い、憂鬱な浮き世の
習いも全て消え失せぬ。) (傍点筆者)

このように最初の3節に描かれた、楽しげに奏でる自然の音と光景の描写は『不滅のうた』に描かれた人生の第一段階、第1-2節にあたる。『不滅のうた』も冒頭では、同じように幼少期の幻想的風景の描写で始まる。

There was a time when meadow, grove and stream,
The earth, and every common sight.
To me did seem
Apparelled in celestial light,
The glory and the freshness of a dream. (1-5)
(牧場も森も小川の流れも、
大地もまた、すべて眼に触るるもは

わたしには天上の光、
 夢さながらの輝きとさわやかに
 包まれているように思える時があった。)

次に、虹は現れては消えて行き／バラは愛らしく、空は雲なく晴れ渡れば／月は歡びに満ち、星づく夜の水面は美しい。／太陽は赤々と昇り行く。(The Rainbow comes and goes,/ And lovely is the Rose,/ the Moon doth with delight/ Look round her when the heavens are bare,/ Waters on a starry night are beautiful and fair;/ The sunshine is a glorious birth;) (10-16) と歌い、すぐ後で「然れど、われは知る、何処へ行けども、／地上から栄光は消え去りしことを。」(But yet I know, where'ere I go,/ That there hath past away a glory from the earth.) (17-8) と焦燥感を見せるけれども、同じく、第3スタンザでも、今、小鳥はかくも楽しく歌を歌い、／小羊は小太鼓にあわせるが如く、飛び跳ねる、...(Now, while the birds sing thus a joyous song,/ And while the young lambs bound/ As to the tabor's sound,...) (19-21) と歌っている。このようにワーズワスが語る人生の第1段階では、その歡びは「古い記憶」('my old remembrances) (20) も、また「浮き世の人々の空しい、憂鬱な出来事」('all the ways of men, so vain and melancholy') (21) も、そのようにきらめく太陽の光のもとで露と消え行く程強烈なものであったのである。しかしながら、そのように自然と生きものが完全に調和して生きる世界とは対照的に、人間は実際、「古い記憶」と「浮き世の人々の空しい、憂鬱な出来事」から全く解放されているわけではない。しかして、詩人は自然の調和ある世界と人間の生活との間隙の故に、周囲の歡びに半ば興ずるに過ぎない。そのようにして、詩人は「大地の幸せな子供」('like a happy Child of earth') (31) の気分に浸りながらも、自己の詩人としての将来と、生活のことを思うと、時折、歡びの高みから、突然失意の底へとつき落とされることがあったのである。これは『不滅のうた』で示された人生の第3の段階における「失意」を意味する。

But, as it sometimes chanceth, from the might
 Of joy in minds that can no further go,
 As high as we have mounted in delight
 In our dejection do we sink as low;
 To me that morning did it happen so; (22-26)

(しかし、よくあることだが、
 我々は、登りつめた喜びの高みから
 喜びの達した高さだけ、それだけ深く
 失意の底に落ち込むもの。
 その朝の私がたまたまそれであった。)

と語り、自らの〈失意体験〉を吐露している。図らずも、詩人が一人の旅人として荒野に居合わせたのはそのような心理状態にあったのであった。このようにして詩人は「恐怖と空想」('fears and fancies') (27) とに襲われたのであった。それは「漠然とした、名状しがたい悲哀、妄想」('Dim sadness and blind thoughts, I knew not, nor could name.') (28) と言うものであった。

いわば、この〈失意体験〉はそれより2カ月前に書かれた『不滅のうた』では、「ひとり我が胸に悲しみの思い湧く」('To me alone there came a thought of grief' (Ode, St. 3, 22), 「我が胸の悲しみもはや季節を損なうことあらじ」('no more shall grief of mine the season wrong';) (26) と言う言葉で言及されている。しかし、そのときの悲しい思いは「折しも口をついてでた詩」('a timely utterance') (23) によって和らいだ言うのであるから一時的なものであった。しかし、『決意と独立』においては、孤独、心痛、悲痛、貧困に苦悩する日々の到来におびえ、またそのような将来への不安といわば動物達に見られる無垢の世界からの追放は次の一節でさらに明瞭となる。

Even such a happy Child of earth am I;
Even as these blissful creatures do I fare;
Far from the world I walk, and from all care;
But *there may come another day to me* — —
Solitude, pain of heart, distress, and poverty.

(31-33) (Italics Mine)

(私も同じように幸福な大地の子だ
これらの幸福な動物達と同じように
浮き世から離れ、あらゆる憂いから
離れて歩いている。しかし、
そうでない日があるかも知れぬ — —
孤独、心痛、悲しみ、また貧困に苦悩する日がある。)

(傍点筆者)

果たして、これらの「漠然とした悲哀」、「名状し難い妄想」とは何を意味しているのであろうか。この一節の背景には当然、当時失意のどん底にあった親しい友人コールリッジのことが去来したのであった。まさに、コールリッジはこの時期の心境を『失意のオード』(*Dejection: An Ode*)⁶⁾ に託している。

But now ill Tidings bow me down to earth
Nor care I, that they rob me of my Mirth

But oh! each Visitation

Suspends what Nature gave me at my Birth,

My shaping Spirit of Imagination! (*Dejection; An Ode*) (238-42)

(だが、今や不幸の訪れが僕を打ちのめしてしまう。

僕はそれによって本来の陽気さをなくしても気にしていない。

だが、ああ、かかる訪れの一つ一つは、

僕が生まれながらに天から授かったものを、

僕の想像力の創造的活力を停止させるのだ。)

その頃、コールリッジは阿片常用のため心身は蝕まれ、また家庭の不和も重なって希望も慰めもなく、詩的想像力を全く喪失していた。同じく、この頃のワーズワスも激しい頭痛、身体の痛み、不眠などに悩まされ、自らも、やがてコールリッジと同じように、詩的能力の衰退を来し、詩が書けなくなるのではないかと言う不安に襲われることがあったのである。さらに、ワーズワスにとっては書くという行為は、そのこと自体が、精神的、肉体的消耗の確かな始まりを意味していた。1801年5月22日に妹ドロシーはコールリッジに宛てて書いている。

'Poor William! His stomach is in bad plight. We have put aside all the manuscript poems, and it is agreed between us that I am not to give them up to him even if he asks for them.'

(「William がかわいそうだ！ 彼の胃はひどく悪い状態にある。私たちは詩の原稿を全部投げ出して、私は彼が要求してもその原稿を与えないことを私たちの間で取り決めていきます。」)⁷⁾

ワーズワスにおいては、集中的な詩作そのものは激しい肉体と精神の苦痛を来したのであるから当然、将来のことを思うと陰鬱で、彼はしばしば失意に陥るのであった。何故なら、詩はワーズワスにとっては生命そのものであったからである。また、結婚を間近に控えフランスに残してきたかつての恋人アンネット・ヴァロンとの心情的清算、及び家計上の経済的困窮など、不安と恐怖に襲われることがあったのである。詩人自ら語るところによれば、1802年4月7日、32才の誕生日にクラークソン家を出てメアリー・ハッチンソンを訪問するためヨークシャーに徒歩で行く途中であった。その時、詩人も認めるように、本詩の冒頭の叙述にあるようなそう鬱の状態にあったのである⁸⁾。また、それより3週間ほど前に「半ば感覚麻痺の状態」('half-stupefied')のコールリッジの訪問を受け、ワーズワス兄妹は彼のことを心配して深夜4時まで語り合ったことが『日記』に記されている。更に4月21日、コールリッジがやって来てセアラ宛の書簡詩『失意のうた』をワーズワス兄妹に読み上げ、兄妹はその詩に耳を傾けながら、歓びが春の景色から消えて行くのを実感したのであった。このように考えるとき、『決意と独立』は詩人自身のことであるよりは、むしろコールリッジ自身のことが背景にあるように思われる。従ってコールリッジが求めた切実な愛と理解と是認とは

ワーズワス兄妹にとっては殆ど超人的な忍耐を要求するものであったのであろう。事実、コールリッジは私事を自ら語りながらも、自己の事柄はほとんど無頓着であったからである。しかして、「自分の生活をかまわぬものに代わって、だれも求めに応じ、力を貸し、愛情を分け与えることはできない。」(‘But how can He who expect that others should/ Build for him, sow for him, and at his call/ Love him, who for himself will take no heed at all?’) (40-42) と、自分に対しても、また失意のコールリッジに対しても、本詩の表題となった『決意と独立』(*Resolution and Independence*) とを促すことになるのである。

4

さらに、このような強い愛の渴望と失意への下降の背後には、ロマン派前衛詩人達の暗い記憶がある。事実、天才詩人と唄われたトーマス・チャタトン (Thomas Chatterton, 1752-70) は詩人としての決意と自立の精神を果たすこともできないまま、貧困に打ちひしがれ、誰にも助けを求めることもなく、ただ「自負心」と〈絶望〉のうちに1770年18才の若い命を自ら絶ったのであった。また農耕詩人ロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-96) は早くから詩才をあらわしたが、その詩才を十分に発揮することなく1796年37才で惜しまれながら、悲しみのうちに早逝したのであった。このようにして、詩人は失意のうちに次のような結論を得ることになる。

By our own spirits are we deified
We Poets in our youth begin in gladness;
But thereof come in the end *despondency and madness.*

(48-9) (Italics Mine)

(自らの精神によって我々は神聖化される。

我々詩人は青春のときは歡びに始まるが、

やがて、最後は 失意と狂氣とがやってくる。) (傍点筆者)

この「自らの精神によって我々は神聖化される。」と言う曖昧な1行は詩人が担う過酷な運命の要約である。つまり若い詩人は青春時は神のような輝きのうちにあるが、その精神がなくなればやがて絶望と狂氣に襲われると言う認識である。ハロルド・ブルーム (Harold Bloom, 1930-) によれば「若い詩人は神のようなものであり、新生を刺激し、地上の永久の爽やかさを表すアポロ (Apollo) の再生であるが、それはその精神が輝き、歡喜に満ちている時だけに過ぎない。」(‘The young poet is a god, a rebirth of Apollo, stimulating new life and representing the perpetual freshness of the earth, but only so long as his spirits remain glorious and joyful.’)⁹⁾。つまり、歡喜不能、そして穏やかな精神の消失はワーズワスにとって詩的想像力の喪失を意味していたので

ある。従って、それは優れた詩の創作と、人間、自然、神との関わり及び愛のうちに生きるのに必要な《創造的能力》（‘Creatiave Power’）の喪失を招来するものであった。

このように、将来への不安と深い絶望とに捕らわれて「あらぬ思い」（“these untoward thoughts”）（53）に耽っていたとき、詩人はかつての自然との一体感を失い、詩的想像力を喪失していたのである。そのようなときに、図らずも詩人は、人影もないその寂しい場所で、しかも広々と大空に開いた池の傍らで、「特別の恵み」（‘peculiar grace’）、「天からの導き」（‘a leading from above’）、「与えられた或るもの」（‘a something given’）（50-1）によって蛭とり老人との遭遇に至ったと言うのである。しかしこのことは、自ら求めて得られたのではなく、啓示的なものとして彼の身の上に起こったことを意味する。実際、蛭取り老人と詩人との遭遇は1800年10月のことであったが、それからおよそ2年の歳月を経てその遭遇の記憶が蘇ったとき、詩人にはその瞬間は奇跡的に思えたのであろう。従って詩人にとってはそれは「特別の恵、天からの導き、与えられし或る物」となったのである。詩人の最初の使用例とされるこれらの宗教的な語彙の使用¹⁰⁾は詩的想像力を喪失していた詩人にとっては《靈感》（‘inspiration’）＝《神の息吹》の到来、〈想像力〉の再生を暗示している。元来、言葉に生命を与え、生命を吹き込み、そうすることによって世の人々に感動を与え、導き、世の中を再生させる予言者の役割を担う詩人にとって、何もない荒涼とした、寂しい場所で、しかも岩とも、海獣ともつかぬ、また生死の判別もつかない醜い老人とのそのような遭遇は、ひとたび喪失した想像力がどのようにして回復されるかを知る手がかりを示している。

Now, whether it were by *peculiar grace*,
A leading from above, a something given,
 Yet it befell that, in this lonely place,
 When I with *these untowered thoughts* had striven,
 Beside a pool bare to the eye of heaven,
 I saw a Man before me unawares:
 The oldest man he seemed that ever wore grey hairs.
 (50-5) (Italics Mine)

（さて、それは特別なる天の恵みによるか、はたまた
 天の導きか、それともな何かの贈り物なるか。
 私はこのような、あらぬ思いと闘い居しとき、
 この寂しい場所で、木陰ひとつない池の傍らで、
 目の前に、はたと一人の老人を見ぬ。
 それは白髪の、いとも老いたる老人なりき。）（傍点筆者）

この時、まず、詩人はその老人の自然との完全な有機的かつ精神的調和に打たれる。大空にむきだしの池の傍らに佇む老人の姿は無限の世界と結ばれ、有機的に自然と調和して生きているように詩人には思えたのである。しかし、その「いとも老いたる老人」の姿はむきだしの高い山の頂上に、ときどき見られる「巨岩」(‘a huge stone’) (57) か、それとも岩か砂の上に這いだしてきて日光浴を楽しむ「海獣」(‘a sea-beast’) (62) のさまであり、一体それは何処からどのようにしてそこへやってきたのか、訝しげである。また極度の老齢のため、老人は「全く生きているわけでもなければ、死んでいるわけでもない、それかといって全く眠っているわけでもない」(‘not all alive nor dead./ Nor all asleep’) (64-5)。腰は「二つに折れて」、頭は「人生の永の旅路に足の上に垂れている」(‘His body was bent bouble, feet and head/ Coming together in life’s pilgrimage’) (66-8)。恐らくは、老人は長年にわたって受けた恐ろしい苦痛か、病魔のために体重以上の重圧に耐えてきたことを思わせる。また彼の手足と、体重、青白い顔を支えているのは腰ではなく、貧困の象徴としての「荒削りの長い杖」(‘a long grey staff of shaven wood’) (72) だけにすぎない。そして老人が荒野の沼のあたりに佇むさまも、動くさまもそれは一団となって「雲」さながらにみえたのであった。果たして、このように詩人が描く孤独と、大空のもとの池、静かに佇む老人、また極度な高齢の描写は勿論、現実の世界とは異なる詩人自らの「幻想体験」(‘Visionary Experience’) である。

このように自然の一部と化した老人の比喩は想像力の機能に託して、詩人自らの「1815年版の序文」のなかで巧みに説明されている。それによると、これらの「巨岩」と「海獣」と「雲の」のイメージにおいて、「直接的、間接的に働く想像力のもつ三つの機能、つまり『意味を与え』(‘Conferring’), 『抽象化し』(‘abstracting’), 『修正する』(‘modifying’) 力が一緒に合体しているのである。石は海獣に近似するように生命力のいくらかを賦与され、また海獣は石に近似するように幾分その生命力をはぎとられ、そのようにして、その中間のイメージは石のもとのイメージを老人の状態と姿により近似する目的で処理され、老人はその二つのものが正しい比喩のもとで一つに結びつき合体する点にまで近づくように、生命も、動いている様子も奪い取られている。雲のイメージについては、ことさら言及する必要はなかろう。」¹¹⁾ と言うのである。

5

同様に、そのような〈幻想体験〉(‘Visionary Experience’) は『序曲』(Prelude) の随処に見られ、ワーズワスに顕著なものである。例えば第1-2巻の幼少期の記述、Alps 徒渉 (V1, 617-48, 688-726), 「時の時点」(‘Spots of Time’) (X11, 208-326) 及び、「Snowdon 登山」(‘ascent of Snowdon’) (XIV, 11-62) の記述、そして「敗残兵」(‘the Discharged Soldier’) との邂逅 (BK. 1 V), ‘There was a boy’ に始まる「溺死者の挿話」(‘The Drowned man’s Episode’) (BK., V,

364-459)), 大都ロンドンの雑踏のなかで遭遇した「盲目の乞食」(‘The Blind Beggar’) の挿話 (BK. V11) などである。よく知られた「時の場所」(‘Spots of Time’) の記述では、例えば木を切り払った平原の山裾に横たわっている、むき出しの沼地の近くで、水差しを頭に載せ、吹きつける強風にあやうく足を踏みこらえて道を急ぐ乙女の光景がある。乙女は折からの強風で着物をあおられ、吹き上げられて当惑している姿であった。詩人はその「幻影のようなものの寂しさ」(‘visionary dreariness’) (Prelude, BK. VII, 256) を描き出そうとすれば人間には、まだ知られていない様々な色どりや言葉が必要になってくるのだと言っている¹²⁾。また、大学最初の夏休みに、郷里で夜の静寂のなかを一人で歩いていたときに、月光に照らされてなにやら眩く、見るも哀れな「敗残兵」、大都ロンドンの路上で遭遇した「盲人乞食」たちのように、これらの「幻影のようなものの寂しさ」と〈孤独な雰囲気〉とを備えた人物たちとの遭遇はいずれも、詩人にとっては「人間的な力を与えるために、適切な警告によって／夢のなかで出会った人のように／もしくは或る遠い国から遣わされた人のように」(‘Like one whom I had met with in a dream:/ Or Like a man from some far region sent,/ To give me human strength, by apt admonishment.’) (111-112), その「寂しい場所」(‘this lonely place’) (52) 及び大都会の雑踏の中で起こったのであった。しかしこれらの遭遇は自ら求めて起こったのではない。それは突然、失意の詩人の前に「特別の恵み、天からの導き、」(‘by peculiar grace,/ A leading from above’) (50-1) によって啓示的に示され、そのようにして詩人は一度喪失した詩的想像力を回復するための手がかりとして、まず「人間的力」(‘human strength’) (112) を賦与されることになるのである。

〈その力〉については、「時の時点」(‘Spots of Time’) の記述¹³⁾ にその詳細な記述を見ることが出来る。つまり、その記述によると我々人間存在のなかには「時の時点」(‘spots of time’) とするものがあって、そこには「人の生命を蘇らせる力」(‘a vivifying virtue’) が宿っているのだと言う。また、「間違った意見や論争好きの思考、些末な仕事や日常の交際の繰り返しの重荷によって落胆させられても、我々の魂はやがてそこから滋養をとり、目には見えないうちに回復して行く力が宿っている」のだと言う。従って、詩的想像力を喪失していた詩人は、路上で遭遇した「いとも老いたる老人」によって、そのような〈力〉を「天の恵み」として賦与され、想像力回復の手がかりを得たのである。

I saw a Man before me unawares:

The oldest man he seemed that ever wore grey hairs. (55-6)

(ふと我が前に一人の男を見ぬ。

それは白髭のいとも老いたる人なりき。)

6

しかして、蛭とり老人との邂逅は既に述べたように、この詩が書かれる2年ほど前（正確には1800年10月3日）の出来事であるにも拘らず、およそ2年程の歳月を経て精神の奥深い「隠れ家」(‘hiding place’)「精神の深淵」(‘an abyss of the mind’)から霧のように湧き起こり、「蛭とり老人」(*The Leech-Gatherer*)の話として結実したのであった。そして無限に年老いて、比類なき人間の苦悩の重荷に耐えてきた老人が、時折身を動かし、杖で池を掻きまわしては、その濁った水面を読書家の眼差しでじっと見つめるさまは、あたかも「占い師」か、「予言者」(‘Diviner or Prophet’)の風貌を思わせる。そこで、詩人は旅人の特権を利用して近づき、

‘This morning gives us promise of a glorious day.’ (84)

(「今日はよい天気になりますね」)

と問いかける。しかし老人の答えとその話ぶりは意外にも「穏やか」で「丁寧」(‘gentle and courteous’) (85-86)である。詩人はその返事に満足せず、さらに言葉をついで、そのように「貴方にとって寂しい場所」(‘a lonesome place for you’) (89)で、一体何をしているのかと聞く。しかし、詩人が、先ず答えに代わって、老人の「生き生きした黒い両目」に見たものは「軽い驚きの閃めき」(‘a flash of mild surprise’) (90)であった。そして老人の語る言葉は「弱い[老人の]胸から弱々しく(‘feeble, feebly’) (92)ではあるが、一語一語は「荘厳な」(‘solemn’) (93)秩序をもってつづき、「高尚な」(‘lofty’) (94)趣を帯びている。また、その語る言葉の選択、節度ある語句の「堂々たる」(‘stately’) (96)様子に、詩人は凡人が理解できないものを見たのである。詩人はそのような老人との対話のなかで、〈恍惚〉(Trance)の状態に陥る。最初は、老人が語る声は「小川の流れのようで」(‘like a stream’) (107)殆ど聞き取れず、また老人の身体全体は「夢のなかで出会ったか」(‘Like one whom I had met with in a dream’) (110)、或いは「人間的な力を私に与えるために、適切な警告によって遠い国から遣わされた人のよう」(‘like a man from some far region sent,/ To give me human strength, by apt admonishment.’) (111-112)に思われた時であった。老人が語る言葉と言葉は混じりあって判然とせず、またその声は〈想像〉によってかき消されて「小川の流れのように」(‘like a stream’) (107)に渾然一体となって聞きとれない。そして、老人の身体は夢の中の風景へと消え始める。次に詩人は「老人が一人、静かに、さ迷いながら荒野をあてどなく歩いて行く」(‘In my mind’s eye I seemed to see him pace/ About the weary moors continually,/ Wandering about alone and silently.’) (129-31)姿を「心の眼」(‘Mind’s eye’) (129)、つまり、〈心眼〉で見たのである。詩人はそこに「神と人とに仕える『厳粛なる』牧師(‘...grave and/ Religious men, who give to God and man their dues.’) (97-8)の姿を見たのであった。このことは、「人間的な力」(‘human strength’) (112)の救済に果たす

〈想像力〉の役割を示したものである。また老人の「その生き生きした両目」のなかに見た突然の「閃き」は彼の身体の無感性と、半ば死んだも同然の風貌とに奇妙に対抗する精神の「活力」を暗示している。さらに、また、その「高尚な言葉」と、年々その数も少なくなった蛭を求めて沼から沼へと放浪する老人が語る話のなかに詩人は「荘厳さ」さえ認めたのである。

7

しかし、詩人の主要な関心は、むしろ老人が無限の困苦に耐えながらも、結果においてはわずかな報いしか得られない彼の職業にある。要は、老人がそのように報われることの少ない運命をどうして受け入れることが出来るのか、詩人はなおも理解に苦しむ。なぜなら詩人はそこに自己の投影を見たからである。詩人はこのことに気がついたとき、愚かにも、さらに偉大なる詩人達の末路と、現在なおも困苦に苦悩するコールリッジのことを思い、自己の将来への不安と苦悩はなおいっそう深まって行く。

My former thoughts returned: the fear that kills;
And hope that is unwilling to be fed;
Cold, pain, and labour and all freshly ill;
And mighty Poets in their misery dead. (113-116)

(以前の考えが再び戻ってきた。

ぞっとする恐怖、実現しがたい希望、
寒さ、苦痛、労働、そしてあらゆる肉体の病気、
そして悲惨なる死を遂げた偉大なる詩人たちのことが。)

このように詩人は困惑し、さらに慰めを期待して、熱心に、「あなたはどのように生活し、どんな仕事をしているのですか。」(‘How is it that you live, and what is it you do?’ (113-119)と同じ質問を投げかける。しかし、老人の答えは同じである。

“Once I could meet with them on every side;
But they have dwindled long by slow decay;
Yet still persevere, and find them where I may.” (124-126)

(「かつて以前は蛭は何処にでもいたものだが、
今では次第に少なくなった。

しかし、私は辛抱して、どこへでも行って探します」)

このようにして、詩人はなおも語り続ける老人を前にして、人影もない荒野と衰えた老人の姿、その口調に当惑されながらも、他方、「内なる眼」(‘inward eye’), つまり、〈心眼〉によって老人の〈幻影〉を見たのであった。その〈幻影〉はただ一人、黙々と、ただ、わびしい沼池を疲れた足どりで、さ迷い歩く老いぼれた老人の姿であった。この〈幻影〉は『決意と独立』が書かれた同じ時期、つまり1802年4月15日に遭遇した『水仙の花』(“Daffodils”, composed 1804; *Poems in Two Volumes*, 1807) の場面を想起させる。孤影飄然たる詩人が、アルズウオーター湖の岸辺にあるゴウバロウパークの向こうの林へ行ったとき、はからずも水際でみた水仙の群は同じように、後になって(1804年)心の「内なる眼」でとらえられ、〈巨万の富〉(‘...but little thought/ What wealth the show to me had brought’;)(17-18)を詩人にもたらし、それは「孤独の喜び」(‘the bliss of solitude’)(22)となったと言うのである。

For oft, when on my couch I lie
 In vacant or in pensive mood,
 They flash upon that *inward eye*
 Which is *the bliss of solitude*;
 And then my heart with pleasure fills,
 And dances with the daffodils.
 (*Daffodils*, 19-24) (Italics Mine)

(心うつろに、或いは物思いに沈みて、
 われ長椅子に横たわるとき、
 あの内なる眼に、水仙の花しばしば閃めく、
 これぞ孤独の喜び。
 そしてその時、我が心は喜びに満ち溢れ、
 水仙とともに踊るのだ。)(傍点筆者)

そのように、詩人が不思議な思いに駆られている間にも、目の前の老人は、一息ついてまた同じ話を繰り返したのである。やがて、老人は話し終えるや、他の話に話題を変えるが、詩人は、なおも「快活」に(‘cheerfully’)(135)、且つ「優しく」(‘with demeanour kind’)(135)、だが慨して「堂々たる」(‘stately’)(134)老人の態度に感服し、そのおぼれた老人に「堅固な意志」(‘so firm a mind’)(138)と「忍耐」(‘Perseverance’)とを見て、当然自嘲の笑いを禁じえなかったと言うのである。ワーズワスは『不滅のうた』の第1-4節【1802年詩】において、『決意と独立』からわずか2カ月前に、自然の栄光の喪失を嘆いたにも拘らず、人間との遭遇においてこのように深い感動を得たときはいつでも、そのような〈幻想体験〉に至ることのできる能力を、なおも保持していたことを示唆するものとして、本詩は興味深い。

注

1. *Resolution and Independence* からの引用は全て Ernest de Selincourt, ed., *The Poetical Works of William Wordsworth* (O. U. P., 1969) によった。
2. Ernest de Selincourt, ed., *Journals of Dorothy Wordsworth* (London; Macmillan & Co. LTD., 1959)
3. Shawcross, J., ed., *S.T. Coleridge: Biographia Literaria* (O. U. P., 1969), Chapt., Xii
4. Moorman, Mary, *William Wordsworth, A Biography: The Early Years* (O. U. P., 1957.), pp.543-4.
5. *Journals*, p.63.
6. 引用は Coleridge, E.H., ed., *The Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge* (O. U. P. 1968) によった。
7. Selincourt, *The Letters of William and Dorothy Wordsworth : The Early Years 1787-1805* (O. U. P. 1967), p.335.
8. Moorman, M., *The Early Years*, p.540.
9. Bloom, Harold, *The Visionary Company: A Reading of English Romantic Poetry* (Cornell Paper Backs, 1971., p.166.
10. Moorman, M., p.540.
11. *Poetical Works of William Wordsworth*, Vol.2, p.438.
'In these images, the conferring, the abstracting, and the modifying powers of the imagination, immediately and mediately acting, are all brought into conjunction. The stone is endowed with something of the power of life to approximate it to the sea-beast; and the sea-beast stripped of some of its vital qualities to assimilate it to the stone; which intermediate image is thus treated for the purpose of bringing the original image, that of the stone, to a nearer resemblance to the figure and condition of the aged Man; who is divested of so much of the indications of life and motion as to bring him to the point where the two objects unite and coalesce in just comparison. After what has been said, the image of the cloud need not be commented upon.'
12. *The Prelude* (1850), Bk Xii, 254-7.
13. *Ibid.*, Xii, 208-23.